

早期肝細胞がんのための 診断と治療

さて、この連載も残すところあと2回となりました。最後の2回は、肝細胞がんについてのお話です。

私自身が香川医科大学（現在の香川大学医学部）を卒業した1990年当時、消化器内科病棟の70％は肝細胞がんの患者で

肝心かなめの 肝臓 のはなし

23

香川大学医学部消化器・神経内科教授

正木 勉

した。その頃は予後も悪く、惨憺たる結末であったと記憶しています。それから約30年。診断・治療はかなり発展し、今ではがんからの生還例も数多く生まれるようになりました。

画像診断と血液検査 早期診断で早期治療

肝細胞がんの早期診断のためには、複数の検査が必要です。早期肝細胞がんのための診断としては、例えばB型・C型肝炎ウイルスを持つ患者、あるいは生活習慣病を有する脂肪肝患者を囲い込みます。そして、画像診断として、造影剤を用いたCT、MRIを使用します。また簡便な腹部超音波が使用されます。さらに、血液検査によって血液中の腫瘍マーカー（AFP、

AFP-L3、PIVKA-II）の測定をすることが、重要な役割を担っています（図1）。

早期肝細胞がんに関しては、先端からAMラジオと同じ周波数（480キヘルツ）の音波を流す針を挿入して、そのエネルギーによる熱凝固で、腫瘍を大きく焼き切るラジオ波焼灼法（図2）があります。

また、がんの栄養源となる血管から抗がん剤を注入し、血管に閉塞物質を詰める肝動脈化学塞栓療法もあります。

外科的治療として、肝切除・肝移植があります。

どの治療に関しても一長一短があり、各々の患者にとっての最も適した治療を選択することが重要です。

次回最終号は、進行肝細胞がんに対する最新の治療法である分子標的治療薬、そして近未来に使用されると考えられる免疫チェックポイント阻害剤についてお話しします。

図1 肝細胞がん早期診断のために

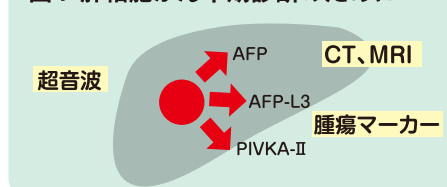


図2 ラジオ波焼灼法

